

森鷗外博士

日本の新聞の報道によると、森鷗外博士は本月十日に逝去された。これは実に東亜文壇の極めて哀惜すべき事件である。

森鷗外(Mori Ogai)名は林太郎、一八六〇年に生まれ、医科大学を卒業、ドイツに留学し、衛生学を専門に研究し、帰国後医学博士になり、のちまた文学博士を授けられ、軍医総監及び東京博物館長に任じ、今年七月十日腎臓病を以て卒す、年六十三歳。

日本の近三十年の文学界に、森氏は極めて大きな功績を残し、坪内逍遥博士と併称される。彼は新文学勃興の時期に多くの精密な翻訳紹介を行い、後に自然主義が起こるまで、一時を風靡した。超然たる態度で、独立に著作し、自ずから一家をなした。だが一方ヨーロッパ大陸の作品の翻訳には、もとより少しも怠らず、最も著名なのにデンマークのアンデルセンの『即興詩人』、ドイツのゲーテの『ファウスト』、『ゲーテ伝』及び『ファウスト考』などがあり、このほかに『一幕物』、『現代小品』、『十人十話』と『蛙』などもまた有名である。著作には戯曲の『わたし的一幕物』、小説集の『涓滴』（のちに『還魂録』と改題）、『走馬灯と分身』、『高瀬舟』、長編に『青年』及び『雁』、伝記故事に『天保物語』、『山房札記』など十数種がある。

『涓滴』は一九一〇年に出版され、そのなかの「杯」及び「遊戯」の二篇は最も注意すべきである。というのは彼の著作の態度と風格がここに最も明瞭に現れているからである。火山の溶岩色の陶の杯を持った八番目の少女は、他人が“自然”と彫った銀杯を借りたくなく、“わたくしの杯は大きくはございません。それでもわたくしはわたくしの杯で戴きます”と言う。これはすなわち彼の小影である。『遊戯』の木村は、万事について遊戯の心を持っており、何をするにしても、みな遊戯であるが、これこそが理知の人の透明な虚無の思想で、常人の生活を暇つぶしにするのとは違う。当時はすこぶる文壇で正統派の嘲弄にあつたけれども、現代人の一種の心情であるからには、当然その存在の価値はある。こうした態度は夏目漱石のいわゆる低徊趣味と比較でき、二家の文章の清淡と腴潤も、まさしく同じように超絶しているが、森氏の思想には、保守的な分子がより少なく、『沈黙の塔』などに見ることができる。この篇はもともと生田長江訳ニーチェの『ツアラトストラ』に、序文として載ったもので、かつて魯迅君が訳出して、『現代日本小説集』に収められている。

『走馬灯と分身』（1913）は二部からなっており、『走馬灯』は全八篇、人間世界の情状を記し、『分身』は六篇、自分の経験を書いていて、とても面白い。「妄想」、「食堂」及び「田楽豆腐」の諸篇を読むと、主人公の性情面目が、まるで目の前にあるようで、こうした描写の手法はまさに極めて及び難い。『高瀬舟』（1918）の内容は、だいたい『走馬灯』と似ているが、そのなかの「魚玄機」、「寒山拾得」の諸作は、古代の材料を採用し、新しい故事に編成して、すでに『山房札記』の先声をなしている。『山房札記』（1919）の類の書は事実の考証に重きを置いているから、それを歴史物と称するが、「魚玄機」などは小説である。現代ではこのスタイルの小説を書く人も少なくない。ただ芥川龍之介が最も多く書き、また最もよく、文章もまた森と似たところが頗る多いので、第二の森鷗外と称せられる所以である。しかしながら『分身』のよ

うなのを書く人は、今ではいなくなった。

森氏の著作のなかに、一篇かつて文集に入らなかった小説がある。最もわたしの注意を引いたのは、九十四葉の短篇 *Vita Sexualis*（『キタ・セクスアリス』）である。この作品は文芸雑誌『昴』（Subaru）の第一巻七号（一八九九年七月）に載ったもので、この雑誌はもともと森鷗外と与謝野寛と晶子、木下杢太郎らの組織で、石川啄木の編集である。しかしこの号が出るや、内務部は直ちに『キタ・セクスアリス』を風俗壊乱の文章と認定、直ちに発売禁止にし、没収してしまった。だからのちの小説集にはこの篇はない。しかも外に流れ出たものも極めて少なく、禁止の一年後には、わたしは発行した書店の人が言うのを聞いたのだが、探そうと思っても、原価の六倍は出さないと駄目だと言う。『キタ・セクスアリス』は『分身』の類の作品で、金井君が六歳から二十一歳までの性的知識の経験を自叙し、子どもの性教育の資料としようとした。わたしから見れば実に究めて真面目な、文学にして教育的意義を併せ持つ書であって、また森氏でなければ書けないものである。しかし医学博士兼文学博士の真面目な作品が、官吏の警察眼によって風俗を壊乱すると断定されて禁止された。原文の最後の節に云う。

“さて読んでしまった処で、これが世間に出されようかと思つた。人の皆行ふことで人の皆言はないことがある。Prudery に支配せられてゐる教育界に、自分も籍を置いてゐるからには、それはむづかしい。そんなら何気なしに我子に読ませることが出来ようか。それは読ませて読ませられないこともあるまい。併しこれを読んだ子の心に現はれる効果は、予め測り知ることが出来ない。若しこれを読んだ子が父のやうになつたら、どうであらう。それが幸か不幸か。それも分からない。Dehmel が詩の句に、「彼に服従するな、彼に服従するな」といふのがある。我子にも読ませたくはない。金井君は筆を取つて、表紙に拉句語で *VITA SEXUALIS* と大書した。そして文庫へばかりと投げ込んでしまった。”

ここに書かれているのは一人の理知の人の性の生活に過ぎないけれども、たいそう価値ある“人間の証券”である、およそ真実に生活しようとする人なら、疎かにすべきではないことである。今回鷗外全集を編集するにあたって日本当局にこの理解力があり、それを完全に編入することを許せるかどうかは分からない。性の教育の実施方法はまことにまだ決定することが出来ない、だが理論は大抵確実になっている。教育界はなお準備に手をつけるべきで、科学と文芸では要するに自由に発表できよう。しかしながら世界各国の道学者は人生には醜悪な部分があり、やるのはよいが言うことは出来ないと思認し、また“臭いものには蓋”主義を堅持して、隠蔽が最高の方法と考えているので、そのため多くの反対と衝突が起こる。しかし性の事は確かに極めて繊細で複雑な問題であり、決して完全に解決することはできない。ちょうど一筋の険しい山道を、暗闇の中でゆけばもちろん人々は転倒を免れないが、たとひ光の中でも転倒する人がないとは言ひ切れない、——だが避けられるものは要するに避けてゆく。道学者の意見は、暗闇の中の転倒は、要するに光の中の転倒に比べてよいとするもので、ひどいのは光の中で転倒しないのは、暗闇の中で転倒するのが習慣に合っているのに及ばないと思つているが、それはもっと可笑しい。『キタ・セクスアリス』の禁止問題から、繋がって、本題とは遠くかけ離れてしまった。一九二二年七月二十四日。

『自分の畑』（自己的園地） 周作人

※初出：1922年7月26日『農報副刊』